

# シェフレにおける「資本主義」語

— 「資本主義」語のはじまり (7) —

重 田 澄 男

- I. 『資本主義と社会主義』の内容構成
- II. シェフレにおける「資本主義」語
  - 1. 資本主義用語の使用
  - 2. 「資本家的生産様式」の使用
  - 3. シェフレの「資本主義」概念
- III. 資本主義概念の変容
  - 1. 「資本主義」語の錯覚的確定
  - 2. 資本主義概念の継承と変容

## I. 『資本主義と社会主義』の内容構成

シェフレの『資本主義と社会主義』の書名は、より正確には、『資本主義と社会主義、とくに営業のおよび資産的形態に顧慮して：賃労働と資本との対立の宥和のための講義』（1870年、チュービンゲン）<sup>1)</sup>である。

この著作は、シェフレが1870年のはじめにオーストリア産業博物館でおこなった5回の公開講義にもとづく<sup>2)</sup>732ページもの大部の書物である。

シェフレは、本書の冒頭に、目次をかねた「内容一覧」を掲げており、さらに、その本文中の15の各講の冒頭にも講の内容についての主要項目を掲げているので、それらを参考にしながら本書の構成と内容項目をしめすならば、それは次のごとくである。

## 序 言

第 1 講 当面のオリエンテーション，社会主義的攻撃とその意義，その代表者たち

### I. 科学的基礎概念の発展

第 2 講 財貨，資本，生産および景気，経済の基本法則

第 3 講 価値，景気

第 4 講 財産と所有，私的財産と共同的財産，家族経済，国民財産

第 5 講 国民経済，個別的生産力の社会的結合：家父長制的，神政的，封建的および資本家的国民経済，資本主義 (Kapitalismus) の本質と経過，資本主義と自由主義，純粋な経済的動機による国民経済の初めての自立的組織たる資本主義，資本主義と社会主義とについての誤った概念

### II. 社会主義の歴史批判とその科学的代表者たち

第 6 講 社会主義的歴史観の意義，古代の経済体制，中世の封建経済と共同体経済についてのラサールの素描

第 7 講 現代の法意識，自由主義と共産主義，連邦主義

1) 自由主義的個人主義の流れ，重商主義，ケネーと重農学派；スミス，リカード，マルサス

第 8 講 2) 純粋な平等主義あるいは共産主義のシステム，トーマス・モア，カンパネラ，フィヒテ，バブーフ，カベー，オーエン

第 9 講 3) 経済的連邦主義，A) それへの過渡，第 1：ユートピア的無政府の連邦主義，ルイ・ブラン，ワイトリング，サン・シモン，フーリエ，第 2：半自由主義的提案

第 10 講 B) 現実的連邦主義，マルロ (Marlo)，ドイツにおける最初の徹底した科学的連邦主義者，著作『世界経済システム』

第 11 講 マルクスによる不払い剰余労働としての資本利潤，1) 絶対的剰余価値，標準労働日，2) 相対的剰余価値，労働価値と労働賃金

との混同への反対，相対的過剰人口，ラサール，ブルードン

### III. 社会主義の主要概念の評価. 経済的結合形態の比較

#### 資本主義の位置

- 第 12 講 社会主義の一致した概念
- 第 13 講 社会における諸個人の資本家的，公共的，および献身的結合関係，社会的結合の強制的形態および自由な形態，自然적および芸術的形態，連邦的形態，連邦的社会形態の資本家的營業形態，A) 社会における開放性と自由な献身，B) 公共的經濟管理，經濟としての地方自治体と国家，公企業の歴史的制限
- 第 14 講 C) 資本家的事業形態，財産形態および所得形態，1) さまざまな資本家的事業形態，私的，共同的，合資会社の，株式会社のおよび協同組合的企業，2) 資本家的所得形態：賃金，利子，収益，年金，地代，3) 資本家的財産形態
- 第 15 講 社会政策の原理，国家の任務
- 主要結論および結語

## II. シェフレにおける「資本主義」語

### 1. 資本主義用語の使用

シェフレの『資本主義と社会主義』は，上掲の目次項目からも窺えるように，基本的内容としては，いわば資本主義經濟の基礎理論とそれにたいする社会主義者の批判的見解についての検討である。

そして，この『資本主義と社会主義』のなかで，シェフレは，資本主義用語を，具体的には，「資本家的生産様式」という用語と，さらにごくわずかながら「資本家的生産」という用語も使っており，それらとともに「資本主

義」という用語をかなりの頻度で、くりかえし使っている。

だが、シェフレは、『資本主義と社会主義』の冒頭からこれらの資本主義用語を使っているのではない。

「序言」では、まず、資本主義用語を使うことなしに、この本で取りあげている主題、すなわち、執筆時点において大きく問題になってきている現実社会における労働問題とそれにたいする社会主義の理論、そして、協同組合運動や組合的企業形態等について指摘している。

つづいて、第1講において、資本と賃労働とのあいだの対立が新しい時代の最大の問題となっているとしながら、変革を要求する社会主義の理論家について、カール・マルロ<sup>3)</sup>、プルードン、ラサール、カール・マルクスの名前を挙げている。

そして、この第1講の終わり近くで、シェフレは、「幸運にも、現在、多くの人々は、社会主義はおそらく十分に考慮された改革によって克服されるであろう、という意見をもっている。わたしは、少なくとも偏見のない人間的な見方をする人々を資本家のなかに見だし、現在、資本と賃労働とのあいだの対立は接近しているという偏見のない科学的な評価をしている沢山の教養ある所有者階級が見いだされる、ということを知っている。私の講義は、これらの人たちのために書かれたものである。……／私の講義は、社会改良によって、社会革命の阻止のために正義と和解のために為すべきこと、ただそのことにのみ役立つものである」<sup>4)</sup>と、社会主義に反対する社会改良主義者としての自己の立場を押しだしている。

ところで、この文章のなかの省略部分に、「現代の資本家的生産様式 (kapitalistische Produktionsweise) の挑発的な弊害」といったかたちで「資本家的生産様式」という用語を初めて使った叙述がおこなわれている。

ついで、第2講では、資本、経済、価値、財産、国民経済等々の基礎概念を取りあげ、そのうえで、第3講では、価値、費用価値と使用価値、交換価値などが取りあげられているが、そこにおいて、「“資本家的”生産様式

（“kapitalistische” Produktionsweise），マルクスによるその定式は  $G—W—G'$  である」<sup>5)</sup>と指摘している。

そのように、この著書のなかでシェフレが最初に使っている資本主義用語は「資本家的生産様式」である。

「資本主義 Kapitalismus」という用語は、第3講のなかで、「社会主義 (Socialismus) が資本主義 (Kapitalismus) を包圍攻撃するという科学的ジャンプ台」といったかたちで初めて使われ、この後、第4講においては、「資本主義」という用語が家族の解体との関連において4回ほど使われている。

そして、第5講にいたって、「資本主義」語は、近代的な国民経済を特徴づける用語として頻出するようになり、目次の内容項目においてさえも、“資本主義の本質と経過”，“資本主義と自由主義”，“純粋な経済的動機による国民経済の初めての自立的組織たる資本主義”，“資本主義と社会主義についての誤った概念”といったかたちで使われている。

さらにその後においては、最後の第15講と「主要結論および結語」にいたるまで、「資本主義」という用語はくりかえし使われている。

資本主義用語の使用頻度についてみると、「資本家的生産様式」は14回、「資本家的生産」は2回しか使っていないのに、「資本主義」という用語は112回も使っている。この使用頻度数からみても、シェフレにとっての基本的な資本主義用語は「資本家的生産様式」や「資本家的生産」ではなくて「資本主義」であることが分かる。

## 2. 「資本家的生産様式」の使用

とはいえ、使用順序についてみると、先に使われているのは「資本家的生産様式」の方である。

しかも、この「資本家的生産様式」という用語がマルクスから引きだしてきたものであることは、「資本家的生産様式の定式は、マルクスによると  $G—$

W—G'である」といったかたちでの指摘が二度もくりかえされている<sup>6)</sup>と  
ころからも明らかである。

たしかに「資本家的生産様式」という用語はマルクスの用語である。しかし、それはマルクスにおいても1860年以降になってやっと使われるようになった言葉である。

シェフレは、マルクスについて読んだ文献として『資本論』第1巻、『経済学批判』、『哲学の貧困』の3冊を挙げているのであるが<sup>7)</sup>、その3冊のなかで使われている資本主義用語は、『哲学の貧困』ではフランス語での「ブルジョワ的生産諸関係 les rapports de la production bourgeoise」であり、『経済学批判』ではドイツ語での「市民的生産様式 bürgerliche Produktionsweise」であって、シェフレが『資本主義と社会主義』で使っている「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という用語は、その3冊のなかでは『資本論』第1巻においてのみ使われているものである。

したがって、シェフレが『資本主義と社会主義』のなかで使っている「資本家的生産様式」という用語は、『資本論』第1巻で使われているマルクスの用語を継承したものである、ということが出来る。

もちろん、用語として「資本家的生産様式」という言葉を『資本論』から引きだして使用したとしても、そのことはマルクスの規定的意味内容をそのまま受け継いだことを意味しない。シェフレの使っている「資本家的生産様式」という用語の規定的概念内容には、シェフレの理論的混乱が含まれており、さらにシェフレ特有の資本主義概念に引きつけた変容がおこなわれているからである。

シェフレは、「資本家的生産様式」について次のように述べている。

「収益の可能性なしには、おこりうる危険を冒すものは誰もいない。……資本家は、その貨幣(G)を継続的に具体的財貨形態(商品, W)に投じ、販売において貨幣での剰余価値(G'あるいは $G + \Delta G$ )を得るために、

経済的貢献のないまったくの吸血鬼としてではなくて、非常に活動的な方法で、ただ最小の費用価値を際だっておしすすめるだけでなく、さらにまた、とくにかれは、賃金労働者をまったく煩わさないために、使用価値を、それとともに現実的需要の満足を、おしすすめるのである。社会主義によって烈しく攻撃されている“資本家的”生産様式（“kapitalistische” Produktionsweise）——マルクスによるその定式は  $G-W-G'$  であるが——は、費用の最小限と使用価値の最大限とを保障するのである……。」<sup>8)</sup>

そのように、「資本家的生産様式」は「費用の最小限と使用価値の最大限とを保障する」ということを、シェフレは次のようなかたちでも述べている。

「ともかく、資本家的生産様式（kapitalistische Produktionsweise）は個別的な費用価値と使用価値を消し去ってしまうという主張は正しくない。というのは、……一定の投機商品（ $W$ ）は、“利益”すなわち剰余貨幣（ $G$ ）を得られるべきときに、選択されて、個別的費用関係にしたがってもっとも安価に生産され、もっとも高い需要に役立てられねばならないのである。資本家的生産様式は、財貨についての具体的に必要な種類と質についての全社会の扶養の目的のために、あらゆる個別的費用価値関係と使用価値関係を経済的様式において調整するのである。」<sup>9)</sup>

このように、シェフレの「資本家的生産様式」概念の内容は、資本家の貨幣（ $G$ ）が投資されて、資本家の経営努力によってもっとも安価な個別的費用と高い需要に役立てられる最高の使用価値をもった商品（ $W$ ）として生産されて販売され、剰余価値をもつ貨幣（ $G'$ あるいは  $G + \Delta G$ ）が獲得されることになるのであって、したがって、そのような資本の運動範式は  $G-W-G'$  というかたちで表現されることになる、というものである。

ところで、そのようなシェフレの「資本家的生産様式」概念は、たしかに生産活動をおこなう資本の運動を取りあげてはいるものの、理論的に大きな問題点がある。

それは、まず第1に、最小限の費用価値と最大限の使用価値とをもった商品の生産によって価値差額としての剰余価値が獲得されるとしており、そこには価値と使用価値との区別と連関を無視した価値論上の混乱がある。マルクスにおいては資本家的生産様式で生産される剰余価値を含んだ新生産物は、 $W = C + V + M$  という価値構成をもった新生産物に他ならぬものであり、使用価値と費用価格 ( $C + V$ ) との差額が剰余価値 ( $M$ ) となるものではない。

さらに、第2に、基本的には、「資本家的生産様式」にとっての規定的過程たる労働過程と価値増殖過程との統一としての資本家的生産過程という直接的生産過程についての内容把握の欠如という致命的な欠陥が存在する。

マルクスの「資本家的生産様式」概念は、その規定的な運動範式としては  $G - W \left\langle \frac{P^m}{A} \dots P \dots W' - G' / (G + \Delta g) \right\rangle$  というかたちでしめされることになるものであって、直接的生産過程における生産にとっての2つの基本的な要因としての「賃労働の形態にある労働」と「資本の形態にある生産手段」との結合による剰余価値の獲得をめざす生産活動であることを規定的過程としているものである。

すなわち、それは「ただ、賃労働の形態にある労働と、資本の形態にある生産手段とが前提されているということによってのみ、——つまりただこの2つの本質的な生産要因がこの独自の社会的な姿をとっていることの結果としてのみ——、価値（生産物）の一部分は剰余価値として現われ、またこの剰余価値は利潤（地代）として、資本家の利得として、資本家に属する追加の処分可能な富として、現われる」<sup>10)</sup> というものである。

すなわち、そのようなマルクスの「資本家的生産様式」においては、投下資本 ( $G$ ) によって購入される商品は、たんなる商品 ( $W$ ) ではなくて、商品

として購入される生産手段 (Pm) と労働力 (A) とであって、それは直接的生産過程へと続くものである。そして、その2つの生産要素が合体しておこなわれる生産過程 (…P…) における新たな使用価値をもった新生産物の生産は、同時に、不変資本 (C) としての生産手段を消費しながらの価値移転と、可変資本 (V) としての労働力の消費による新価値創造によって、剰余価値 (M) をも含む価値をもった新生産物の生産でもあるのである。そして、そのような生産物の商品としての販売が資本にとっての利潤の獲得となる、というものである。

ところが、シェフレの理解している「資本家的生産様式」の運動範式は、 $G-W-G'$  であって、マルクスの資本主義範疇の規定的過程たる生産活動そのものとしての生産過程における生産資本としての  $W \left\langle \begin{matrix} Pm \\ A \end{matrix} \dots P \dots W' \right\rangle$  なる運動が欠落した資本の価値増殖運動となっていて、いってみれば生産過程における「資本家的生産」を捨象した資本の価値増殖運動としての把握に他ならないものである。

そのように、シェフレの「資本家的生産様式」の規定的内容は、マルクスにおけるように生産活動そのものにおける近代社会特有の「生産様式」の歴史的形態規定性をしめすものとなっていない。それは全社会的な競争関係をつうじての財貨の費用価値と使用価値との調整をおこなう「経済的様式」に他ならぬものである。

### 3. シェフレの「資本主義」概念

それでは、「資本主義」という用語でもって『資本主義と社会主義』のなかでシェフレが表現しているのは、いかなる規定的内容をもった事物であるのか。

シェフレは、『資本主義と社会主義』の「序言」において、それまで取り組んできた「わたしの仕事の第一は、国民経済理論の不可欠の概念を展覧さ

せた」ことであって、そこにおける「経済的結合の形態についてのわたしの研究は、国民経済的形態学の開始のきっかけを生みだした」<sup>11)</sup>と強調している。

この「国民経済」における「経済的結合の形態」の把握ということが、シェフレの近代社会把握にとっての基軸的内容をなすものであって、「資本主義」概念の把握においてもそのような内容が規定的な役割を果たしている。

この問題意識と把握内容は、シェフレが『資本主義と社会主義』刊行の3年前に出版した『人間経済の社会的システム』第2版 (*Die gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft*, Bd.2, 1867) における内容とかかわっている。その点について、シェフレは、自伝『わが生涯』のなかで、「『資本主義と社会主義』は、)『人間社会の社会的システム』という特別の書名が考えられた1867年に出版された国民経済の第2版にもとづいて、科学的により一層おしすすめたものである」<sup>12)</sup>と述べているところである。

そして、シェフレは、そのような観点にもとづきながら、「資本主義」について、「現代の国民経済の支配的組織形態としての資本主義 (Kapitalismus) は、大きな共同体についての社会的生産過程を形成し、そこにおいてはあらゆる労働能力と資本能力との使用が大量に組み込まれている……」<sup>13)</sup>ととらえるのである。

そして、そのような社会的生産過程を形成する現代の国民経済の支配的組織形態として、「資本主義は、純化され改良されたときには、自立的な個人の企業体の相互のすばらしい普遍的な動力のシステムとして、人々の国民経済的に正しい普遍的運動の維持のために継続的に不可欠なものでありつづけ、自然的宇宙の秩序化された全体運動のための天文学的メカニズムとして不可欠なものである」<sup>14)</sup>と、次のように宇宙的に秩序化された全体運動のメカニズムに比しているのである。

「社会における資本家的組織——種々に形成された資本財産の基礎上的の利得をめぐっての、自立的に個別化した営業体の競争——は、たんに公正であるのみならず、道徳心の新たな形態を、人々の国民的および国際的な経済的共同体の範囲の拡張にともない、実際的な独占にたいする一層強力な障壁を維持する。それゆえ、文化史の進歩のなかで、資本主義のみが、社会の生産的な大量的運動を経済的に秩序づけて、充足する。それは、自立的な生産体の幾百万のあいだの収益＝吸引と損失＝反発のその基礎的な力でもって、宇宙の調和的な運動の多様で単一のシステムと同一化する。」<sup>15)</sup>

国民経済全体の統一的編成としての「資本主義」と天文学的な「宇宙」の統一性との対比については、シェフレは、「私は、資本主義のこのすばらしい単一性およびこの単純なすばらしさを、天文学的な宇宙との社会経済的な比較によって、分かりやすく探求した」<sup>16)</sup>と自負しているところである。

このようなシェフレの「資本主義」概念は、資本主義を社会全体のシステムの形態として把握しようとするものであって、そのようなものとして近代社会の経済的構造をとらえようとする概念に他ならないものである。

そのように、シェフレは、「資本主義」について、「国民経済的生産共同体」における「生産力の編成と結合」という近代社会の経済システムについてのとらえ方に目を向けながら、その基軸的な関係を、競争をともなう無数の営業組織や生産体の「結合様式」という社会的な結合の特殊な形式においてとらえられるものとしているのである。

「競争している生産体の無数の自立した、自由でしなやかな結合をともなう資本主義は、それゆえ、現実的には、連邦的な形態と運動において生産力の宇宙を秩序づけるのであって、ただそれだけがこのことを可能にするのである。それは、社会的な形態的發展の一般的法則にしたがって、家族的結合様式や公共的結合様式よりも、より大きな、より多様な内容を把握

することが可能であることを、その自由な、広い、特殊化した結合形態として提示するのである。それゆえ、それはより高い文化を不可欠ならしめているのである。』<sup>17)</sup>

このように、シェフレの「資本主義」概念における基軸的要因は、生産体や企業組織の社会的「結合様式」の形態であって、「資本主義」は、他の結合様式たる「家族的結合様式」や「公共的結合様式」と異なって、純粋にもっぱら経済的な動機によってのみ支配されているところの競争のもとの特有の結合様式をとって、国民経済全体さらには国際的關係においても一大共同体を形成することになる、というものである。

すなわち、「資本主義において、社会は、その経済的生活について、国民経済として、その組織を自己の基盤の上に打ちたて、それ自身を1つの純粋な経済的に運動させるメカニズムをあたえる」<sup>18)</sup>ものであって、「資本主義のみが、純粋に経済的な組織、経済財の分配と消費であるように思われるところの、経済的に純粋でより実り豊かな社会形態である」<sup>19)</sup>と、純粋に経済的な関係でもって形成される社会形態として編成される結合様式をとるところに資本主義の特徴をとらえようとするのである。

「資本主義は、……われわれにとって、なにはさておきあらゆる点において、純粋にもっぱら経済的な動機によってのみ支配されているところの、最初のそして唯一の可能な人々の経済的結合形態として出会うものであるということのみ、わたしは想起する。／他方、その他の結合の組織力は——奴隸的關係においても、封建的隷属性においても、公共的な支配關係においても、自由な一面的あるいは相互的な献身においても、——他の動機にもとづいており、そこではたんに第二義的な、しばしばまったく無意識的で意図しない、できるだけ経済的な欲求充足として、形成されるものである。われわれはまた、すでに、そこでは、貨幣の社会的価値量によっ

て厳密に計算された資本主義が、純粋な経済性その高度な反射作用の道をつうじて他の社会的結合のなかに入り込む、ということを知っている。」<sup>20)</sup>

そして、シェフレは、資本家的国民経済としての「資本主義」を、このような「国民経済」についての「個別的生産力の社会的結合」としての観点にもとづきながら、家父長制的・神政的・奴隸的・封建的な諸形態に対比されるものとして、把握しているのである。

そのようなものとして「資本主義がその国民経済的指揮を遂行する外的過程は、個々人のまったく自由な交換流通であり」<sup>21)</sup>、そして「資本主義自身の性質は、労働者とそして労働者についての全面的な自由競争以外のあらゆる他の規制者を排除する」<sup>22)</sup>というかたちで、「資本主義」においては「競争」によって個々の個人も企業体も統合され編成されて社会的結合をおこなうことが強制されることになるのである。

「社会において相互に押しあう個々の企業資本のすべての競争は、現代の資本家的生産秩序 (kapitalistische Produktionsordnung) のより高い経済性の客観的な強制的規制者である。企業経営者は、全体の利益のために、合理的な費用価値計算および使用価値計算の義務のためにきわめてきびしく強制される。」<sup>23)</sup>

かくして、シェフレは、その「主要結論および結語」において、「資本主義」について次のように述べている。

「現存の資本主義は、最高の資本利潤をめぐる投機的競争による諸個人の社会的統合秩序であって、——わたしは、資本主義の領主的形態の悪用による大衆の隷属および萎縮における資本主義の変性についてのみ反対

である。わたしは自由な営業を欲する。]<sup>24)</sup>

### III. 資本主義概念の変容

#### 1. 「資本主義」語の錯覚的確定

ところで、問題なのは「資本主義」という用語のルーツである。

シェフレの「資本主義」という用語は、その出所がまったく分からないものである。

すでにみてきたように、マルクスには基本的には「資本主義 Kapitalismus」という用語は存在していない<sup>25)</sup>。『資本論』第1巻におけるマルクスの資本主義概念をしめす用語は「資本家的生産 kapitalistische Produktion」と「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」とである。

そのようにマルクスには「資本主義」という用語が存在していないのであるからして、「資本主義」という用語はシェフレがマルクスから引きだしてきたものではないことは明らかである。

ところが、シェフレは、マルクスには「資本主義」という用語は存在していないということに気づいていない。シェフレは、マルクスが使ってもいない「資本主義」という用語がマルクスにあると思込みながら、『資本主義と社会主義』では、マルクスにおける近代社会の経済システムを表現する用語として「資本主義」という用語を取りあげているのである。

しかも、シェフレは、マルクスの「資本主義」用語はシェフレ自身の「資本主義」用語よりも狭い内容の概念であるとみなしている。彼はそのことを次のように述べている。

「誤解を避けるために述べておくと、マルクスは資本において私的資本を

理解し、資本家的生産様式において賃金労働者を支配して対立している特有の営業形態を理解している。……これによって、資本主義の概念は、わたしが従来までに確定していたこの言葉の概念よりも狭くなっているのである。」<sup>26)</sup>

「マルクスは、……あらゆる資本に反対しているのではなくて、一方的な支配と非経済的な支配統制と結びついた特殊な営業形態に反対して、対応しているのである。“資本家的生産様式”は、資本財なき生産ではなくて、私的資本財産の支配のもとでの大生産、社会的な分業的生産である。彼は、資本主義について、われわれのこれまでの講義におけるよりもより狭く限定された組織形態——すなわち、特殊な（私的および営利経済的な）営業形態の資本主義を、理解しているのである。」<sup>27)</sup>

ところで、「資本主義」用語は、シェフレがマルクスに取り組む以前に確定していた「言葉」であるというシェフレの指摘にもかかわらず、『資本主義と社会主義』出版の3年前の1867年に公刊した『人間経済の社会的システム』においてシェフレが「資本主義」という用語を使った形跡はない。

それは、『人間経済の社会的システム』の本文中に見いだせないだけでなく、11ページにもわたる詳細な「索引」のなかにも、「社会主義」や「共産主義」の項目はあるけれども、また「封建制度 Feudalismus」や「奴隷制 Sklaverei」の項目はあるけれども、「資本主義」という項目は存在していない。もちろん、「資本」という項目は存在し、さらに「資本種類」「資本形成」等々の「資本」関連項目は載っているにもかかわらず、「資本主義」という項目は存在していないのである。

ついでながら、「ラサール」の項目はあるけれども、「マルクス」の項目はない。

さらにいえば、もし、マルクスに取り組む以前に、シェフレ自身が独自に

意識的に確定した用語として「資本主義」という用語と概念を打ちたてているとするならば、「資本主義」という用語をもっていないマルクスに「資本主義」という用語が存在しているという認識はありうるはずがないであろうし、そのうえ、ありもしないマルクスの「資本主義」語はシェフレの「資本主義」語よりも狭い意味内容のものであるという解説は不可能である。

ところで、さらにシェフレは、マルクスとシェフレとの「資本主義」の相違について指摘した2つの引用文においても見られるように、「資本家的生産様式」という用語と、「資本主義」という用語とを、並列的に使用している。

すなわち、シェフレは、「資本主義」という用語を確定的に使用するようになってから後においても、「資本家的生産様式」という用語の使用を止めておらず、『資本主義と社会主義』の最後の第15講にいたるまで、この2つの用語の並列的使用をつづけているのである。

このことは、シェフレの「資本主義」という用語は、マルクスの「資本家的生産様式」という用語に代わる代替用語として使われるようになった言葉ではない、ということの意味している。

シェフレは、「資本家的生産様式」と「資本主義」との両者の対比的検討をおこなっていない。だが、「資本家的生産様式」と「資本主義」とを、密接な関連をもちながらもニュアンスの異なる規定的内容をもった用語として使っているようである。

すなわち、「資本家的生産様式」という用語については、「私的資本財産の支配のもとでの生産」という資本家的経済活動による、生産物の費用価値の最小限化と最大限の使用価値の実現による剰余貨幣の獲得と、それをつうじての社会的な経済活動の調整をおこなうという、近代社会の経済活動にかんする用語として使っている。

それにたいして、「資本主義」という抽象名詞形での用語は、経済的組織の社会的な「結合様式」による編成を表現するものとして、近代社会の経済システムをより概括的なかたちでとらえる用語として使っていることが多い。

そのように、「資本主義」という用語をマルクスは使っておらず、またシェフレがマルクスに取り組む以前に「資本主義」という用語を確定している形跡もなく、さらに、シェフレ独自の用語として自覚的に打ちたててマルクスについての点検をおこなったものとも考えられないのであって、まさしく出所不明な用語といわざるをえないものである。

では、シェフレの「資本主義」という用語は、一体どこから、いかにしてできたものであるのか。

実際には存在していないマルクスの「資本主義」という用語と概念が存在していたとみなし、しかも、そのマルクスの「資本主義」概念はそれ以前にシェフレが確定していた「資本主義」概念よりもより狭い意味内容のものであるということを確認したという、ありうるはずのないシェフレの指摘は、なにを意味しているのか。

それらのことは、なによりも、シェフレによるマルクスの『資本論』の読み方の杜撰ずさんさを意味する。それは、さらにいえば、シェフレの「資本主義」という用語と概念のいい加減さをもしめしているのである。

それにしても、マルクスには存在していない「資本主義」という用語と概念を、シェフレは、マルクスに取り組む前に確定していてマルクスとの比較をしたと、どうして思い込んだのだろうか。

率直に言って、正確な事実是不明である。

だが、そのようなありうるはずのないシェフレの「資本主義」という用語についての不可解な事態を理解するためには、① シェフレにおける、近代社会の経済システムの現実的事態とその特徴的内容についての把握と、② それについての「資本主義」という用語による表現とを、区別しながら解読してみる必要があるように思われる。

ここで、シェフレによる「資本主義」という用語の使用にいたる経過を概観してみよう。

そのさい、さしあたり「資本主義」という用語を取り外して、近代社会の

経済システムという現実的事態そのものについての内容把握におけるマルクスとシェフレとの比較と、その相違の確定としてみるならば、シェフレの指摘はそれなりに理解可能となる。

シェフレは、マルクスの『資本論』に取り組む前に、すでに『人間経済の社会的システム』（1867年）において、近代社会の経済システムについての理論的把握をシェフレなりの「国民経済」における「経済的結合」というかたちで確定している。

そして、その後、『資本論』第1巻が刊行された1867年から1870年までの3年のあいだにマルクスの『資本論』に取り組んで、『資本論』における近代社会の経済システムの構造的把握をシェフレなりにとらえる。そして、そこにおいて、マルクスによる近代社会の経済システムの構造的把握はシェフレのものよりも狭い内容のものであるということを見いだす。

このことが、シェフレの指摘している「[マルクスの]資本主義の概念は、わたしが従来までに確定していたこの言葉の概念よりも狭くなっている」ということの実際的な意味内容であろう、と思われる。

シェフレの説明が不可解な相貌をしめすようになるのは、そのような事実内容を、マルクスには存在しておらずシェフレ自身もより以前に確定している気配のない「資本主義」という用語でもって説明したことから生じてきているのである。

ここで問題になってくるのは、近代社会の経済システムの規定的特徴の内容をいかなる概念と用語でもって表現するのか、ということである。

シェフレは、マルクスによる現実的事態の内容の把握を検討しながら、『資本論』から、近代社会の経済構造についての規定的要因をしめす概念として「資本家の生産様式」という用語を引きだし、それを自分なりに取り入れている。

ここまでのところは、まず確かな事実関係であるといえるであろう。

問題は、そのうえで、「資本主義」という用語がいかにして出てきて、使

われるようになったのかということである。

それについては、確実な証言も、資料も、存在しない。状況証拠による推論的判断によらざるをえないところである。

では、これから、『資本主義と社会主義』における「資本主義」用語の使用状況とその経過について追ってみよう。

シェフレは、『資本主義と社会主義』の「序言」においては、「資本家的生産様式」という用語も「資本主義」という用語もまったく使っていない。

ところが、予備的オリエンテーションたる第1講においては、『資本主義と社会主義』での主題たる、近代社会における賃労働と資本との対立について指摘し、近代社会にたいして体制批判をおこなっている社会主義者について概観しながら、その終わり近くにおいて、「カール・マルクスは、その著書『資本論』において、……とくにイギリスの経済学的文献についてのまれな知識をもっており、才気があり、多面的な歴史的・哲学のおよび古典的教養のある人物であることを証明している」と、マルクスならびに『資本論』について述べたうえで、社会主義者による批判にさらされている近代社会の私的所有と関連させながら、次のようなかたちで「資本家的生産様式」という用語を使っている。

「わたしは社会主義のもっとも強力な攻撃の到来のもとで、私的所有の擁護を遂行することを考えているのであるが、しかしそれが、たんなる相手方にたいする悪意を前提として出発するときや、現代の資本家的生産様式 (kapitalistische Produktionsweise) の挑発的な弊害の救済のために、部分的には十分に根拠のある真面目で科学的な社会主義的批判にたいして表面的に取りつくりろふ弁護をもって反対するようなときには、わたしはそれに取り組むことはできない。」<sup>28)</sup>

ここにおいて、シェフレは、「社会主義」が批判的攻撃をしている現代の

経済システムを、「資本家的生産様式」というマルクスによる用語でもって表現している。

つづく第2講《科学的基礎概念》では、シェフレは、マルクスたち「社会主義」者のとらえる近代社会の経済組織の構造と特徴について次のように指摘する。

「社会主義は、私的資本の指導あるいは“指揮”のもとに成立する現在の国民経済的生産共同体が、分業によって、分業に照応した現実的資本財のあらゆる企業への累積によって、生産的あるいは経営的に、以前には奴隷制および封建的支配が生産力の編成と結合を媒介していたであろうようななんらかのものとして成り立っていることを、承認する。」<sup>29)</sup>

ここでは、シェフレは、「資本家的生産様式」という用語も「資本主義」という用語も使うことなしに、「社会主義」者のとらえる近代社会の経済システムを、「国民経済的生産共同体〔のとり〕生産力の編成と結合」というシェフレ特有の視点から問題にし、そして、「社会主義」者の把握では、現代の社会においては「私的資本の指導あるいは“指揮”のもとで……生産的あるいは経営的〔活動による〕生産力の編成と結合」がおこなわれている、とみなしているのである。

ついで、主として価値論を取り扱った第3講において、「“資本家的生産様式”，マルクスによるその定式は $G-W-G'$ である」と、近代社会の経済システムをとらえる概念としての「資本家的生産様式」という用語と概念がマルクスから引きだしてきたものであることを、明示的に指摘する。

そして、そのあとに、「資本主義」という用語を、次のように打ちだしてくる。

「社会主義 (Socialismus) が資本主義 (Kapitalismus) を包圍攻撃するという科

学的ジャンプ台は、われわれにとってはいささかの不安を注ぐものでもない。」<sup>30)</sup>

ここにおいて、シェフレは、初めて、「資本主義」という用語を打ちだしているのであるが、それは比喩的な叙述においてはあるが「社会主義」という用語にたいする対比的な概念として使われているのである。

この後、第4講《科学的基礎概念（つづき）》において、「資本主義」という用語を家族の解体との関連において4回ほど使い、つづいて、第5講《科学的基礎概念（結び）》に入ると、シェフレは、「資本家的生産秩序 kapitalistische Produktionsordnung」という用語や「資本家的生産様式」という用語をしばらく使ったうえで、「資本主義」という用語を、近代的な国民経済を特徴づける用語としてその規定的内容をしめしながら30回ちかくも使っている。

そこでは、「資本主義」という用語にもとづいて近代社会の規定的特徴や本質的内容がさまざまなかたちで指摘されており、さらに、目次項目においてさえも“資本主義の本質と経過”等々といったかたちで、「資本主義」という用語が使われているのである。

しかも、そのなかで、次のように「資本家的生産様式」と並列した指摘もおこなわれている。

「社会主義者たちが、現在の国民経済を、“資本家的生産様式”によるものとして、“資本主義”のヘゲモニーによるものと特徴づけて説明するならば、正当である」<sup>31)</sup>

このように、シェフレは、『資本主義と社会主義』のなかで、社会主義者による近代経済システムにたいする批判的見解の検討をおこなうなかで、まず、『資本論』から近代社会の経済構造を把握するカテゴリーとして「資本

家的生産様式」というマルクスの用語と概念を引きだしてくる。

そして、その「資本家的生産様式」を自分なりの用語として使いながら、さらに、シェフレ自身やマルクスが解明しようとしている近代的経済システムの構造的特徴を表現する用語として、「資本家的生産様式」というマルクスの用語とは別のより概括的な用語として「資本主義」という用語を使っているのである。

ところで、すでに述べたように、「資本主義」という用語は、シェフレが、マルクスの「資本家的生産様式」なる用語とは別の用語として、みずから自覚的に新しい用語として確定して、意識的に使っているものではない。

というのは、もしシェフレが「資本主義」という用語を彼自身の独自の用語として自覚的につくって意識的に使っているのだとしたら、マルクスにおける「資本主義」用語の不在については気がついたに違いないし、シェフレとマルクスとの「資本主義」用語の概念内容の相違が存在しているといった認識はおこりうるはずがないからである。

そのようにシェフレの使っている「資本主義」という用語が、用語表現についてのシェフレの明確な自覚的な確定によるものではないとするならば、それは無意識的かつ無自覚的につくられて使われた用語と判断せざるをえないことになる。

どうして、そこで「資本家的生産様式」とは異なる用語が無意識的につくられることになったのか、そして、それはどうして「資本主義」という言語表現をとるものとしてつくられることになったのか。

このことについてのシェフレ自身による明示的な説明は見当たらない。それについては、状況判断による推測に頼らざるをえないところである。

ところで、シェフレの使うようになっている「資本主義」という用語は、シェフレにとっては次のような4つの構成モメントにもとづいてつくられているものである。

まず第1に、シェフレの「資本主義」という用語は、シェフレがもともと

確定している国民経済における社会的な「結合様式」というかたちでの近代社会の経済システムの把握を表現するのにふさわしい用語として使われている。

第2に、そのこととも関連して、マルクスの『資本論』から引きだされてきた「資本家的生産様式」という用語における「生産様式」の歴史的限定性という生産にかかわる規定的要因には縛られない、シェフレの把握する近代社会の経済システムにとっての規定的内容をとらえるにふさわしいより概括的な概念を表現する用語として、「生産様式」という規定因を取り外した用語となっているものである。

第3として、マルクスによる「資本家的生産様式」という用語による近代的経済システムの把握と関連しながら、そこから、「“資本家的”生産様式」という用語においてしめされていた近代社会の経済的システムにとっての規定的要因としての「資本家的 kapitalistisch」という表現における「資本」や「資本家」とかかわらせた用語となっている。

第4として、「社会主義 Sozialismus」との対比において近代社会の経済システムをしめすものであり、しかも、用語としては「社会主義」と同じように「……主義」という抽象名詞として概括的な表現形式をとった用語に他ならぬものである。

これらの諸モメントを組み込んだ用語として、『資本主義と社会主義』の取組みのなかで、シェフレにおいて、「資本主義 Kapitalismus」という用語が無意識のうちに浮かびあがってきて無自覚的に確定されることになり、それが使われることになったものと思われるところである。

このように、近代社会の経済システムについて、「資本家的 kapitalistisch」生産様式と関連づけられ「社会主義 Sozialismus」に対抗する内容をしめす言葉として、「資本主義 Kapitalismus」という用語が、無意識的に、なんとなくすでに以前からあった言葉であるかのように、ごく自然に、使われることになったというものであろう。

シェフレは、そのような「資本主義」という用語を無意識的に打ちたてながら、その「資本主義」という用語はシェフレが確定していた近代社会の経済システムの構造的特徴を表現するものであると思ひ込み、さらに、マルクスの近代社会の経済システム把握についてマルクス自身もそれを「資本主義」と表現しているものと錯覚しながら、近代社会の経済構造のシステムの基本構造の把握におけるマルクスとシェフレ自身との相違を、「資本主義」という用語と概念における相違とみなすことになった、というものであろう。

これが、シェフレにおける奇妙な「資本主義」用語についての無意識的な錯覚による成り立ちにかんする、合理的に考えうる唯一の推論である。

## 2. 資本主義概念の継承と変容

すでにみてきたように、シェフレの「資本主義」は、近代社会の経済的な社会システムの特徴をしめす用語である。

このような近代社会の経済構造の把握をおこなおうとするシェフレの「資本主義」概念は、「資本主義」用語の使いはじめの時期におけるピエール・ルルーや、ルイ・ブランや、サッカレーや、ブランキなどのような、たんなる「資本」あるいは「資本家」そのものと同義の一般的用語や、あるいはその特定のあり方をしめす用語とは、規定的事物そのものが異なっていることは明らかであろう。

したがって、シェフレの「資本主義」用語は、同じ「資本主義」という言葉でありながらも、ピエール・ルルーらの先行「資本主義」用語を継承したものではない。

近代社会の社会体制としての経済システムをとらえる用語としてのシェフレの「資本主義」概念は、そのかぎりにおいて、マルクスの「資本家的生産様式」概念と共通性をもっているものである。

だが、マルクスの「資本家的生産様式」とシェフレの「資本主義」との継承関係は、いささか錯綜しており、しかも不透明である。

というのは、シェフレは、マルクスの著作に取り組む前に、マルクスとは無関係に、近代社会における社会的な「経済的結合の形態」についての理論的把握をおこなっていて、そのため、マルクスに取り組む以前に近代社会の経済システムをしめすものとしての経済システムの把握を確定していたと思っ込んでいるからである。

たしかに、シェフレのとらえている近代社会の経済システムの内容にかんするかぎりは、マルクスから引き継いだものではなくて、マルクスに取り組む以前にシェフレなりに確定していたものである。

しかし、用語としての「資本主義」はそうではない。

「資本主義」という用語は、シェフレがみずから自覚的に確定した用語ではなくて、マルクスの『資本論』への取組みをつうじて無意識的なかたちで生みだしたと思われるものである。

すなわち、シェフレの「資本主義」という用語は、マルクスの「資本家的生産様式」という用語と概念に触発され、「社会主義」と対応する用語として、無意識的につくりだされたものであると思われる。

したがって、シェフレの「資本主義」は、その用語法にかんするかぎりは、マルクスの「資本家的生産様式」用語に触発されて生みだされてきた用語として、マルクスからの継承性をもったものとみることができる。

だが、そうでありながらも、シェフレの「資本主義」は、概念内容においても、用語法的にも、マルクスの資本主義カテゴリーとは相違するものである。

もともと、シェフレの「資本主義」の内容は、シェフレ自身によって打ちたてられたものであって、マルクスの『資本論』の規定的内容とは相違するものである。

「資本家的生産様式」という用語によってしめされているマルクスの資本

主義カテゴリーは、近代社会において「資本家的生産」という特有の生産形態のうえに成立する生産様式の特殊歴史的な近代的形態であって、近代社会にとっての生産的基礎のとする歴史的形態を規定的要因とするものである。

それにたいして、シェフレの「資本主義」の内容は、競争している生産体あるいは経営組織の特殊な「結合様式」としての「現代の国民経済の支配的組織形態」に他ならないものである。

そのことを、シェフレは、「資本主義は、これによって、競争する資本家たちの最大の企業利益をめぐっての、“恣意的な”管理のもとでの、1つの国および国際的な生産組織についての、幾百万もの労働諸個人の編成として、表現される」<sup>32)</sup>ものである、と述べている。

そのように、シェフレが「資本主義」という用語でもって表現しようとしているものは、近代社会の経済構造における経営組織や諸個人の社会的な結合形態に他ならないものであって、ここに社会的な経済システムの基軸的内容をとらえているシェフレの、近代社会の経済的構造の規定的内容は、マルクスのような「生産様式」の特有の特殊的形態としての「資本家的生産様式」という用語によっては的確な表現をされえないものである。

社会的に統合する特有の編成形態をしめすものとして、シェフレにおいては、マルクスのような生産的基礎にかかわる要因についてではなくて、規定的要因としての、「生産」にかかわらない表現用語が必要とされたに違いない。

かくして、シェフレは、近代社会特有の経済システムの内容をしめす用語として、マルクスのように「資本家的生産様式」なる用語によってではなくて、マルクスとは規定的内容の異なるシェフレ自身の近代社会の経済システムを表現する用語として、マルクスの使っていない「資本主義」という用語を使うことになっているのである。

「資本主義」という用語は、抽象名詞形をとって、「資本」あるいは「資本家」がかかわる規定的要因については無限定であるため、マルクスと

違って「生産」に直接にかかわらない基軸的内容についてのシェフレの近代社会の経済システムの把握にとっては都合のいい用語に他ならないものである。

かくして、「資本主義」用語の歴史としては、シェフレの「資本主義」はマルクスの資本主義についての概念と用語からの変容をひきおこしている、といわざるをえないものである。

このような用語法の相違は、生産的基礎において資本主義の規定的要因を把握するマルクスと、競争のなかでの生産体あるいは営業体の社会的な結合様式というところに資本主義の規定的内容を把握しようとするシェフレとの、資本主義範疇の規定的内容の把握に関連しているといわざるをえない。

〔注〕

- 1) A. Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensformen: Vorträge zur Versöhnung der Gegensätze von Lohnarbeit und Kapital*, Tübingen, 1870.
- 2) Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd.1, Berlin, 1905, S.159-160. Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, Vorrede, S.v.
- 3) カール・マルロ (Karl Marlo, 1810-65)。シェフレが傾倒していた連邦主義的社会主義思想家。本名カール・ゲオルク・ヴィンケルブレヒ (Karl Georg Winkelblech)。ドイツの経済学者で、復古的法学的社会思想家。バーデンに生まれ、ギーゼンで化学と物理学を学び、1835-37年にマールブルクで化学の私講師・助教授をつとめ、39年にカッセルの高等工業学校の教授になった。43年にノルウエーを旅行中、工業労働者の貧困の問題に強く心を痛め、社会問題を研究するようになった。48年にはクルーヘッセンの国会議員になり、労働者や手工業職人の労働運動を援助した。社会・経済問題の著述ではカール・マルロのペンネームをもちいた。〔主著〕*Untersuchung über die Organisation der Arbeit, oder der Weltökonomie*, 3 Bde. Kassel, 1850-59. 『労働の組織または世界経済の制度にかんする研究』, *Über Maßsysteme und Geld*, Kassel, 1855. 『度量制度と貨幣』 (A. メンガー『労働全取権史論』1886, 森田勉訳, 1971年, 未来社, 61ページ(注20)および232ページ(訳注六)参照。)
- 4) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S.13-14.
- 5) *Ibid.*, S.50.
- 6) *Ibid.*, S.50, 114.

- 7) *Ibid.*, S.309.
- 8) *Ibid.*, S.49–50.
- 9) *Ibid.*, S.115.
- 10) マルクス『資本論』第3巻, 『マルクス=エンゲルス全集』第23巻(b) 1126 ページ。
- 11) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, Vorrede, S.VI.
- 12) Schäffle, *Aus meinen Leben*, Bd.1, S.166.
- 13) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S.117.
- 14) *Ibid.*, S.123–124.
- 15) *Ibid.*, S.720.
- 16) *Ibid.*, S.501.
- 17) *Ibid.*, S.506.
- 18) *Ibid.*, S.125.
- 19) *Ibid.*, S.488.
- 20) *Ibid.*, S.506–507.
- 21) *Ibid.*, S.119.
- 22) *Ibid.*, S.651.
- 23) *Ibid.*, S.114.
- 24) *Ibid.*, S.731.
- 25) 重田澄男 「「資本主義」語なきマルクス——「資本主義」語のはじまり(4)——」  
『岐阜経済大学論集』第34巻第2号, 2000年9月, 参照。
- 26) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S.310.
- 27) *Ibid.*, S.340.
- 28) *Ibid.*, S.14.
- 29) *Ibid.*, S.28.
- 30) *Ibid.*, S.51.
- 31) *Ibid.*, S.116.
- 32) *Ibid.*, S.116.